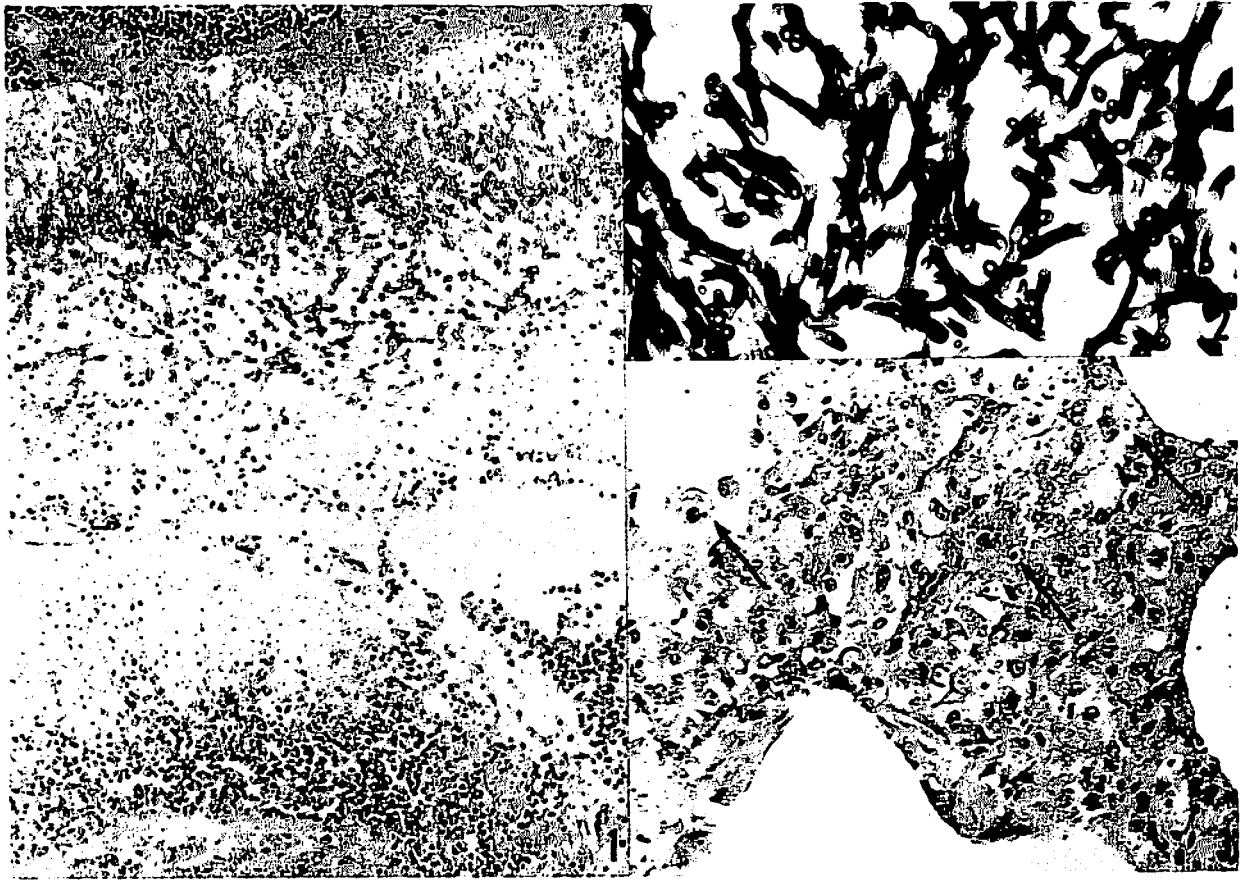


真菌（アスペルギルス）性気管支炎を伴うジステムパー肺炎

岩手大学家畜病理学教室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.283



家畜における *Aspergillus* (A)肺炎の報告は多いが、犬では上部気道である鼻腔や副鼻腔粘膜に病巣を示す症例の報告が多く、肺の病巣については知られていない。

本例は体重9kg、2才の雌柴犬で、1974年5月9日から発熱、食慾不振、下痢、嘔吐を訴え、27日までの間に1,750mgのクロラムフェニコール、300万単位のペニシリンが投与されたが、改善が見られなかった。27日には白血球数が $1,300/\text{mm}^3$ に減少し、神経症状を發した。臨床的に神経型ジステムパー(D)と診断され、3日後に予後不良として安楽死を行なった。

提出標本は左横隔膜葉の一片で、この部は肉眼的にも気管支内に膿様物の存在が認められた。組織学的に気管支は剝離上皮をいれ、上皮細胞内に封入体を容れるものも多い。一部においては腔内に出血がみられ細胞性頽廢物をみだし、上皮の剝離、固有層から粘膜下織にかけて核崩壊におちいったリンパ球および好中球の浸潤と組織の壊死が強くみられ、内腔頽廢物には多数の菌糸が団塊状をなして存在し、ここからのびる菌糸は粘膜下織に侵

入増殖する像が認められた(図1: HE $\times 130$)。これらの菌糸は巾約 4μ 前後で隔壁を有し、Y字形の分岐を示し、PAS陽性で形態学的にはA. sp.の真菌と考えられた(図2: Grocott $\times 530$)。また、肺胞内には細胞性滲出はほとんどみられず、肺胞壁は一般に細胞要素にとみ、しばしば増殖膨化した明るい胞体を持つ上皮により肺胞はいちじるしく狭小となつてみられた。これらの上皮細胞内にはしばしば好酸性滴状封入体が細胞質内に主として認められた(図3: HE $\times 265$, 矢印: 封入体)。

以上の所見から、本例はD感染により発病し、多量の抗生物質投与により、細菌による二次感染は防ぎ得たものの、D病巣の進行とともに、菌交替現象あるいは白血球減少にみられる抵抗力の低下により、真菌の気道感染を受けたと考えられるものであった。標本提出の意図は犬にきわめて稀なA. sp.による気管支炎にあったが、純粹なD肺炎像に多くの論議が集中し、病理組織学的診断としては「真菌(アスペルギルス)性気管支炎を伴うジステムパー肺炎」とされた。